「授業備品」N035 H. 29. 4. 1「教え込み授業から子供が創る授業へ」（6県に配布中）

子供が学び合いで「自由に動き、自分の考えと違うときは相手に質問する、仲間と心を通わせ話し合う、分らない仲間には教える」、こんな構図の授業となっているだろうか。授業は子供の未来保障をする時間だ。小手先の授業改善や教材研究ではよい授業は出来ない。自らの授業をよくよく見直してみるのだ。教え込みの授業から子供が創る授業へ変えよう。

1 学力観が変わった

学力観が変わってきている。知識・技能を中心にした単なる暗記型の学力観から、思考力・判断力・表現力を主とする学力観へ変わってきている。そこには、探究的な学習過程が存在する。課題への感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動の取り組みが真剣になる。身に付けた知識・技能を活用し、その有用性を実感する。見方を広げ、更なる学習への意欲を高める。学んだことで自分の成長を自覚したり、自己の生き方を考えたりする。

学ぶ過程においては、子供同士がお互いに認め合い、支え合う。理解力のある子が一人で先に進むのではなく、仲間を支援する協働的な学び合いを行う。過去の1点を競う時代の授業の学力観ではなく、主に生きる上での表現力を伸ばす学力観が変わっていることに気付くのだ。

2 教え込みの授業

教え込む授業とは、教科の内容を教師が解説したり、説明することが多い授業だ。教科書を教師が教え込み、子供を受け身にするような授業は、様々な弊害を生む。教師の押さえつけ（押さえつけていることに気が付かない教師）や、教え込み授業を行うとそれに耐える事のできる子供はついていけるが、多くの子供はついていけない。結果として学力は向上しない。

教え込みの授業は、教師と子供の心が離れる。一方的な教師の話を聞くため、板書を写すだけ（説明やまとめ）となったり、はては眠くなる子供さえ生む。こうした授業はもう過去の話にして欲しい。かつてのような受験用の知識・技能だけを問う入試（教え込んだ知識・技能）もなくなってきている。生きる上での思考力・判断力・表現力を問う記述式の問題に変わってきている。だから教え込みの授業を変えなくてはならない。

教科の内容や学び方を論じる前に、「教え込んでいるかどうか」を自らに問うとよい。子供の立場に立ち考えるとよい。教師自身が教え込みの授業をしていることに気が付かなければ、子供は変わらないし伸びない。

3 教科横断的な学び（授業のユニバーサルデザイン化）

次期学習指導要領（3章生きる力の理念の具体化と教育課程の課題）には、「現行学習指導要領は、各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられており、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むためかは明確でない。このことが各教科等の縦割りを越えた指導改善の工夫や、指導の目的を「何を知っているか」ととどまらず「何ができるようになるか」に発展させることを妨げている背景ではないか。」の記述がある。学び方は教科間みな同じである。

教師がこれまで受けてきた授業スタイルではない。一教科だけの自己流のスタイルの授業でもない。学習指導要領に記述されている「問題解決的な授業」を主にした学び方がその中心となる。その詳細を吟味した学習過程のスタンダード（40項目）が方法となる。内容は、学級経営的な要素と授業方法の要素からなっている。

4 はじめての学習過程スタンダード

前号をさらに縮小したものである。岐阜県や群馬県で説明した資料である。

まず、学習過程のプロセスである。大よそ7つの学習過程からなっているが、まずは、5つの学習過程をマスターするとよい。①学習問題（資料）の提示（スタンダード2・資料・学習問題） ②学習課題の設定（スタンダード5②段落課題 追究課題の後、考察（練り上げ）を意識した全教科共通の課題提示） ③自力解決（スタンダード11個人思考・個人追究 ④集団解決（スタンダード15班学習（小集団）・17単純意見交換・18「考察」（学級全体） ⑤振り返り（スタンダード20まとめ・23振り返り）等である。

◎教え込みの授業が続くと、子供の学力は上がらなかった現実を受け止めよう。教科内容を教えることが重要であろう。学び方も同じく重要である。もっと大事なことは、「**教え込みの授業（教師主体）**」をしないことだ。